

■全国の「同人雑誌」を読む

いよいよ、これから、全国の「同人雑誌」を読むことをはじめよう。「文芸思潮」の「同人雑誌評」を書くためである。私は、この仕事を依頼されたから引き受けたわけではない。私は、自分から、「やりたい」と思ったから、引き受けたのである。《思考力の衰え》や《思想の枯渇》を感じはじめると、私は「小説を読む」。小説には《答え》がない。《答え》は自力で探し出すしかない。《答え》を見いだせず、悪戦苦闘することこそ小説であり、小説を書いたたり読んだりすることこそ、思考や思想の原点である。もともとらしく、目先の政治問題や経済問題、あるいは社会問題を、さも《大問題》でもあるごとく、熱く語り、熱く論じることは、私に言わせれば、《思考停止》以外のなにものでもない。「思考力を鍛える」とか「思考力は、こうすれば伸びる」とか、あるいは「国際情勢がよくわかる本」「現代思想入門」とかいった類のハウツー本を、私は読まない。そんな安直な駄本ばかり読んでいるから思考力は衰え、思想は枯渇するのだ、と私は思っている。私は、逆に「思考力を鍛える」ために小説を読む。たとえば、ドストエフ

スキーの「罪と罰」。小説が読めなくなったら、その時がおそらく、私のオシマイ（思考停止）の時だろう、と思う。さて、小説ならなんでもいいというわけではない。私は最近、商業文芸誌（「文藝界」「群像」「新潮」）「すばる」「文藝」などに掲載されている小説を読むことをやめた。芥川賞や直木賞の受賞作品もほとんど読まない。「なんのために書くのか」「何故、書くのか」「これを書いておかないと死ぬに死ねない」という《文学性》も《作家性》も、それらの作品からは感じられないからだ。私は、上手な小説より、心を撃つ小説を読みたい。だから同人雑誌の小説を読むことにしたというわけだ。それほど期待していなかったが、同人誌の小説は予想外に面白い。というより期待した通りに面白い。そこには、《人間の探求》がある。私は、若い頃、商業文芸誌の新人賞応募原稿の「下読み」というものをやったことがあるが、その時は、大量の応募原稿の小説を読むことが、ただひたすら苦痛であったが、それは、夢中になって読み耽るといような小説に出会わなかったからである。同人雑誌の小説を読むことは苦痛ではなかった。むしろ、逆だった。私は高校時代、小説を読みはじめた時に感じたのと同じような「小説を読む喜び」を感じた。私が尊敬する文芸評論家の江藤淳氏は、私のインタビューに対して、「小説を読むことで読解力を鍛える」とか、「私の政治評論は、文芸評論家の書く政治評論だ。だから新聞記者

や政治評論家などの書くものとは違う」「これから政治評論のようなものを止めて、漱石論に戻ります……」というようなことを話してくれたことがあったが、今、あらためて、そのことを痛感した。その時、私も、あらためて「小説を読むこと」からはじめようと思った。小説を書くことも、小説を読むことも、そして仲間たちの原稿を集めて、自分たちの同人雑誌を、身銭をきって発行することも、私には、いわくいいがたい「崇高な行為」のように思える。繰り返しだが、小説には《答え》がない。小説を書く人も小説を読む人も、《答え》を探さなければならぬ。そのプロセスが小説である。他人の言動を非難し、お説教を繰り返すようなエッセイや評論や雑文の類いとは、そこが決定的に違う。

さて、同人雑誌を読むことにしよう。同人雑誌に書いてある作家たちは、高齢者が多いようだ。私も「高齢者」の一人だが、昨今の「老人問題」は年齢の問題だけではないように見受けられる。現代の老人問題は、孤独な人間存在と直接的に向き合うという実存的問題のように見える。

●「文芸中部」(愛知県) 117号

「たった一人の孤独」(堀井清)が、もともと面白かった。この小説は、老人の孤独を描いているように見えるが、私には、人間存在そのものの孤独、つまり《実存》を描いているように読めた。八五歳の老人が、紆余曲折の挙句、

最後に流れ着いた場末のボロアパートに住んでいる。彼は、人生の目的も生きがいもない。ただ生きているだけだ。ただ、意味もなく、目的もなく、「生きる」とは何か」を追求していく。こういう文章がある。

《外に出ようと不意に思う。人生に目標などない。人間にはきっと始めから人生の意味も目標もないのだ。人が苦しむのは、人生に意味がないからである。意味がないのであればその意味を自分で探さなければならぬ、困ったことだ。困った、困った、というのがこのところの自分の口癖になっている。》

しかし、この小説が面白いのは、こういう認識(哲学)の元に、「八五歳の老人の孤独」な日常生活を具体的に描いていることだ。時々、声をかけて外出するアパートの隣人も孤独な老人だ。妻との離婚、娘の家出……。定食屋の女性、町内会長……。隣室の老人の部屋には若い女性が入り入りにいたが、その女性に裏切られて、その老人(今野)は意気消沈している。

《今野雄二はうまそうにコーヒを飲んだ。けれど、俺にとってはたったひとりの知人だった彼女に裏切られて、本当のひとりになった。そういつて今度は太いため息をついた。目の前に俺がいるじゃないか、俺はあんなの知人でも友人でもないのか、と自分はいつた。今野は、そうだね、といつていつまでも自分の顔を見ているのだった。》

この終わり方も、なかなかいい。

●「組香」(大阪府) 5号

「大阪文学学校」の出身者たちが運営している同人雑誌らしい。この同人雑誌は、なかなか充実した雑誌だが、私が注目したのは、もともと素朴で、もともと平凡な印象の「湯けむりの街」(新谷翔)という作品だった。タイトルからして地味で、ありふれた凡庸な小説だろうと思いがながら、読んでみた。読んでいくうちに、次第に小説の世界へ引きずりこまれていった。不思議な魅力のある小説だった。大阪で新聞記者をしているらしい主人公が、大学時代を過ごした大分県別府を再訪する物語。別府の温泉街を舞台にしている。主人公は、大学に入学したばかりの学生で、温泉旅館で「賄い」のアルバイトをしていた。その時、同じ旅館で「仲居」のバイトをしていて、知りあったのが「優子」。その優子という女性を訪ねていく小説。優子が別府港で出迎えてくれる。しかし、目当ての女性は優子ではない。優子の高校時代の友人で、カフェで働いている「清美」だ。花火大会の夜、偶然、遭遇し、優子に紹介されたのが「清美」だった。これもまた偶然の行きがかりで、その夜、主人公は、清美と一夜を過ごす。しかし、清美には、病的なところがあり、精神状態が不安定。自殺願望があり、自傷行為を繰り返す。主人公は、自分を愛してくれ、その上、自分に全面的に依存してくる清美を見捨てることが出来ない。



い。将来の目標もない主人公に、清美が、「新聞記者になったら……」とすすめる。それが、主人公が、新聞記者になっただきっかけだった。その後も自傷行為を繰り返す清美とは、何回も別れようとするが、その度にヨリを戻す。ある日、清美の父親が訪ねてくる。「娘をよろしくお願ひします」と。しかし、清美は、鉄道自殺し帰らぬ人となる。主人公は、はじめて、清美の「墓参り」をするために、別府を訪れたのであった。この小説は、ストーリーもテーマも平凡でステレオタイプだが、激しく胸をうつものがある。私は、最後まで、一気に読んでしまった。何が、そうさせるのか。あらためて、「小説とは何か」を考えてみたい。

●「ふくやま文学」(広島県) 33号

もう一つ、印象に残った作品があった。岡野初枝「私は捨てた」。そろそろ死を自覚し始めた初老の女性が、墓の問題で悩む小説である。

「墓」や「墓地」や「遺骨」……というような問題もまた、人間にとって普遍的な問題である。《死》が普遍的であるように。あらゆる人種、民族に、この問題は、ある。墓と無縁な人はおそらくいない。大学進学を機に、家族や故郷と離れて、県外の高知県に住みつくことになった「私」は、兄に、「家族も故郷も捨てた」と思われている。久しぶりに帰省し、墓参りをしている時。

《家を捨てて出てから、振り返りもしなかった者が、我が家の墓に入ろうとは思わないでくれ。せめて遺灰だけは、高知に海へ撒いてやるから、それだけでありがたいと思え。冷たい言葉を背中に浴びせかけられて、固まってしまった私は、声も出さないうで震えていた。》

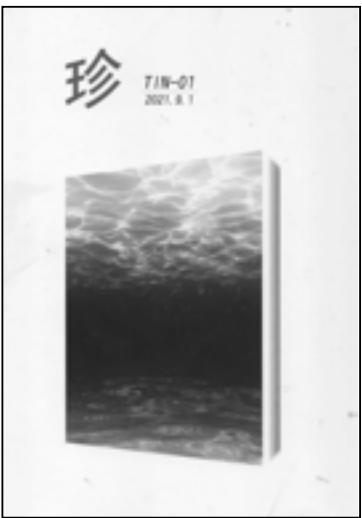
私は、この一節にギクリとする。触れてはいけない問題に触れた時のように。

おそらく大学を卒業し、その地で就職し、いつの間にか自分自身も、年老いて、両親や兄弟や故郷を懐かしく思い始めたのだろう。そういう時、この兄の言葉は、きつい。しかし、ある種の真実ではある。避けて通ることは出来ない。その兄も、「私」よりも先に死んでしまう。

●「珍」(高知県) 創刊号

珍しいタイトルのこの雑誌も素晴らしい。高知県で、新しく創刊された同人誌らしい。薄い雑誌だが、同人たちの創作に対する熱気が伝わってくる。

「徒・花」(塩崎あまう)。[VUCA]「ブーカ」(山本弥穂)。「散歩」(西村雅人)。「名前のないひち」(冬由野森)。



これらの各編を、私は、半ば感動しつつ読んだ。描写がしっかりしているから、通俗的なところがない。特に「散歩」は、老人が、ただ散歩するだけの小説だが、街や風景、建物、庭……などの細かい描写の積み重ねのあげくに、かすかに漏れ出てくる「小さな物語」がいい。大文字の言葉(戦争、政治、コロナ)や大きな物語が甚に氾濫し、一般庶民までが大言壮語する時代に、こういう細かい描写中心の小説を読むことは、一服の清涼剤になる。

●「弦」(愛知県) 110号

「弦」もレベルの高い雑誌だ。冒頭に掲載された「ドラゴンの卵」(長沼宏之)もいいが、私は、どちらかと言うと、「森のカフェ」(木戸順子)、「宵待ち」(小森由美)、「あ

ん餅ぞうに」(國方学)の方が、いい小説だと思った。それぞれ、《死》と向き合った小説で、話が抽象的ではなく、具体的なのが素晴らしい。小説も思想も哲学も、《具体性》というものが命だ。抽象的、観念的な表現ではなく、具体的、個別的表現が、思考力や読解力を鍛える。

「森のカフェ」は、「全く心当たりのない女性からの電話で、母の死を知った。あまりにも唐突で半信半疑だったが、よどみなく母の名前、住所、電話番号を時折涙声になりながら伝える野島加代という人が嘘をついているとは思えなかった。」という衝撃的な文章で始まる。主人公の「私」は、一人息子で、独身。母とは遠く離れて暮らしている。早くに父は交通事故で死に、母は保育園で働いていた。母の不倫相手のことで、母子は疎遠になっていく。母は、その後、うつ病になり、保育園も退職し、山奥の村に家を建て、そこで、一人で、老後を過ごしていた。

「冷蔵庫の扉に、あなたの名前と電話番号が書いてある紙がマグネットで留めてあります。一人息子だから何かあったら頼むねと、いつも言われていました」

「私」は、あわてて母が住んでいたという山奥の村へ。そこで、死んだ母と再会し、村の友人たちに助けられながら葬式を終える。母の残した日記をめくりながら、村の友人たちに囲まれた、老後の母のささやかな「幸せ」に思いを寄せる。村を去る日、最後に立ち寄った「森のカフェ」



があった。一緒に新聞社を受験したこと。同じ地方新聞社の年上の女性記者を、ともに知っていること。実は、主人公は、地元の大学生時代、水泳部で、大学のプールでの小学生溺死事件に、当事者として遭遇する。その取材にやってきたやり手の女性記者と取材対象の主人公は、取材を受けているうちに、女性記者主導で、次第に親密な関係になっていく。「一緒に新聞社で働こうよ」という女性記者に誘われるように、新聞社を受験する。同じ受験会場に現れたのが、W大学に進学していた野原だった。野原は合格したが、主人公は、最終面接まで行くが不合格となる。主人公は、女性記者と別れて東京へ。しかし、遠距離恋愛のようなもの、細々と続く。女性記者には結婚話が持ち上がっている。ある日、上野の山の上の主人公の下宿に、突然、訪ねて来て、「今夜、結婚しよう」と。二人は結ばれるが、

に、母の作ったタペストリーが掛かっていた。

●「SCRAMBLE」(愛媛県) 39号

青春小説や恋愛小説は嫌いではない。しかし、通俗的、ステレオタイプの甘ったれた青春小説や恋愛小説ほど、不愉快で、気持ちの悪いものはない。そういう小説や映像が目にはいると、激しい怒りがこみ上げてくる。逆に私は、今でも、「伊豆の踊子」や「野菊の墓」「ピノキオ」「トムソーヤの冒険」「赤毛のアン」「アルプスの少女ハイジ」などを、大真面目に読んだり見たりして、涙ぐむ。こういう小説がある限り、何事があるうと、私は、生きていけそうな気がする。

「青春の風景」(白井靖之)という小説は、タイトルからしてステレオタイプの「通俗小説」を連想しそうだが、読んでみたら、そうではなかった。確かに、技術的には、文体もストーリー展開も上手とは言えないだろうが、しかし、私は、何故か、感動してしまった。私の小説を読む時の原理原則の第一綱目は「上手な小説より感動させる小説を」というものだ。まさに、そういう小説だった。愛媛県松山市の道後温泉のホテル(旅館)の前で、二人の高校時代の同級生が、偶然に再会するところから始まる。東京に出て、サラリーマン生活を送った主人公(岩井)と、故郷の新聞社に就職し、社長までのぼりつめたという噂の野原。親友というわけではなかったが、二人の間には共通の話題

その男性まさりの辣腕女性記者は、なんと処女だった。しかし、女性記者は、癌で、あっけなく死んでしまう……。主人公は、墓参りのために帰郷し、そこで、偶然に同級生に遭遇したという話だ。では、私は、この小説の《何》に感動したのだろう。それは、おそらく、真摯に《自分自身》と向き合う姿勢に、であろう。吉本隆明は、詩や小説が成功するためには、《自己を偽らぬこと》をあげていた。私は、この小説の題材が、フィクションなのか、事実に近い体験をもとにしたものなのか知らない。いずれにしろ、人に《感動》を与える小説は素晴らしいと思う。

最後に植谷雄高の言葉を引用しておこう。私自身への《いましめ》でもある。

《私は、作品は、容易に表現しがたい果でもない困難に向ってただひたすら努力することだけであって、その結果がほめられようと非難されようと黙殺されようと仕方のない種類の仕事に属すると思っっている。》(「蓮と海嘯」)

優秀作推薦

- 「森のカフェ」木戸順子(「弦」110号)
- 「たった一人の孤独」堀井清(「文芸中部」117号)
- 「青春の風景」白井靖之(「SCRAMBLE」39号)
- 「湯けむりの街」新谷翔(「組香」5号)

●「クレイン」(群馬県) 41号

様々な雰囲気作家陣が揃っていて、読んでいて飽きない。中でも、「とげ唄——西山富子の場合」(糟屋和美)は目を引く。西山富子は公務員を定年退職し、残された九十歳の父を引き取るが、彼は「手のかからない老人だった」。父と富子の間には穏やかな時間が流れ、老衰による自然死で父を見送る。ここまでの描写が、後の「夫の介護」と対比されていて面白い。簡潔な表現が読者に対して親切だ。父と対照的に夫は幻視、幻聴を伴い大声で騒ぎ、暴食し、不機嫌で暴れまわる。更に「男が俺に向かって嘲けりの歌を囁く」と怯える。富子は夫を精神病院に連れていき、ここでタイトルの「とげ唄」の背景が明らかになる。夫の兄は帰還兵で、そのPTSDに悩まされ、当時の悪習として座敷牢で生涯を終えたのだが、少年だった夫の脳裏に刻まれた哀切な唄こそが「とげ唄」であった。父と夫、二人分の「老いの終末」を見送った富子の様々な心情表現の後ろで、効果的に「とげ唄」が見え隠れする描写はたいへん巧みで読み応えがあった。

「人間と悪魔」(水丘曜二)も軽妙で愉快。ただ、思い切

ってもっと短くまとめた方が一気呵成に読者を惹きつけて、倫理観を気持ちよく裏切るリズムを感じさせられたのではないか。神父の存在の伏線回収はお見事。

●「季刊作家」(愛知県) 98号

今回たまたまなか世界観の似た作品が重なり、読み疲れてしまった。現実と精神世界が交錯する構成で攻めてくる「Ella No」(鈴木友範)、「隣人たちの道」(木戸岳彦)の二作品がそうだ。単体で見れば秀作なのだが互いの魅力を相殺してしまったのが惜しい。その中で異彩を放ったのが「よもぎとクローバー、そしてヤスデ」(富岡秀雄)。密室パニックものに分類されるだろうが、飢え・渇き・極小空間での排泄の不快感などがたいへん嫌な感じに描写されているのが出色の出来だ。ただ、主人公の精神的な緊迫感や焦燥感の描写が淡白すぎ、人によっては消化不良に思う



だろう。「焦る体力すら残っていない老い」の乾いた悲しさと諦観を押し出して欲しかった。あと、基本的なことだが落ちてしまった場所の説明が不明瞭。どんな場所か彼が喘いでいるのかわからず、最後まででもどかしい思いが拭えなかった。

前述の「隣人たちの道」(木戸岳彦)は途中まではそれこそ手に汗握る気持ちだった。リカルドがもつと腹黒く欲深く、自治体や昭夫の愛娘を貪るさまを読みたかった。主人公の歪んだ妄執に全て沈み込んでおしまい、というのは広げ過ぎた風呂敷を急いで畳んだか。もつと長く、それこそ連載の形をとって書ける題材だと思う。

●「mon」(大阪府) 18号

レベルの高い作品が揃っており、この同人誌の主力作品



小島野人誌
mon Vol.18
2022.6.18

浅井梨恵子	内藤 万博
飯田 未和	松城 悠
大橋健太郎	望月 なな
キン ミカ	森田 哲司
島田奈穂子	

群が持つ共通の魅力がいかなく發揮されていた。彼らの作品に触れると、伏線回収の妙技が散りばめられた複層的な構成と視点により社会情勢についていつしか読者は学ばせられ、その隙間で置き去りにされてしまった人たちのやるせない心の残滓について深く思考せざるを得ない。しかもそれが押しつけがましくなく、読後には登場人物それぞれの生涯のひとふしに沿って思い出を追体験したような、ごく自然な共感を残してゆくのがたいへん快い。特に印象深かったのは「運ぶ人」(内藤万博)、「溺れる亀」(飯田未和)の二作品だ。

「運ぶ人」(内藤万博)は昨今注目を集めているフードデリバリーの内情について詳しく調べてあるが、単に情報を羅列するのではなく、もう活字ではその心情を知ることが難しくなった若年層の生活と経済とが臨場感を持って迫ってくる。ただ、非正規、完全歩合給の配達員と社会保障に守られた大学教授の社会的立場の対比はわかりやすすぎる。近似値の二者の間にある格差の方が救いような感じが際立つように思う。

「溺れる亀」(飯田未和)は、傷つけられる側の立場や心情のバリエーションが思いもかけない展開を見せてかなりの読み応えがあった。被害者というのは客観ではなく主観で決定されるものだというのを改めて認識させられる作品である。



●「文芸復興」(東京都) 142号

完成度の高い作品群が詰まった一冊である。同人誌を読むと、やはり似たような雰囲気文体・ジャンルが揃ってしまいがちだが、ここに関してはそうではなかった。各々が得意とする分野で綿密な下調べがあらうことを思わせる丁寧な構成がなされている。金融や教育界、歴史上の人物や風俗についての豊富な知識が読者の好奇心を程よくくぐって飽きさせない。特にその手法が巧みなのが『渡と袈裟』に衣川(森下征二)だろう。

まだ十代の文覚が従兄弟・渡の妻である袈裟に横恋慕し、その母の衣川を脅して無理に関係を持った。ここまでではよくある戦国不倫なのだが、この後の顛末として問男の盛遠(文覚の出家前の俗名)と人妻の袈裟が共謀して夫の渡殺



届きそうな身内の女の垣間見せるエロスも、おふろという舞台さえあれば罪悪感はいさっぱり流されていく。心地よさに長風呂しすぎた主人公の最後の壊れっぷりも見事。若手が寄稿したとは思われない昭和風味満載の「引退」

(森夢次)も面白かった。ただ、闘う氣力を失くした親父さんが包んでよこした金の意味をもっと考えて欲しい所だ。無血引退の会場として選ばれてしまった、という疑念がなぜわいてこないのか非常に不自然。それともこれは読者に託された視点なのか。昭和任侠の甘い所だけでなく苦い所も描いて欲しい。「やっぱりね」という続編を期待する。

●「海馬」(兵庫県) 44号

作品数は三編と非常に少ないが、完成度は高い。特に「葛藤」(山下定雄)は連作らしいが、今回の作品も独立した

害を企てるも、計画は頓挫して手違いから袈裟が命を落とす。この後の男女三人の心象風景を各々の一人称で語らせている。隠れた真実を事実の裏から無理やり引っ張り出してさらけ出すとするやり方は名作映画「藪の中」を彷彿とさせて大変面白い。ただ、すべての謎を明かせる立場の袈裟が死人に口なし状態なのが惜しい。チョイ役登場していた陰陽師に反魂術でも使って真相を語らせて欲しかった。「悪夢のてんまつ」(丸山修身)も主人公のイライラがよく伝わってきて秀逸。読者の立場で続編が気になる、というのは負けた気がして少し悔しい。

●「全作家」(東京都) 117号

「お楽しみ小説」の色合いが濃い。というのも、上手いツートップが適度にエロスを放り込んでいるからだ。「惠春の焦がれ火」(井上岳人)などは、慧春尼の存在を全く知らなくても妄想をたくましくして楽しめる。ただ、逆に知っている読者からすると、あまりにも伝聞の資料に忠実に過ぎて物足りなさが残っているのも事実。妄想を楽しむという点においては読者の自己責任に頼り過ぎに思う。もっと作者の妄想も散りばめて貰いたいものだ。

個人的には「おふろ物語」(崎村裕)を推したい。きちんと読み込めば横溝チックな閉鎖的かつ女性蔑視の匂いが嗅ぎあてられるが、そのようなまともな倫理観はすべておふろのむうとした生あたたかい湿気に消えてしまう。手の

短編として十分通用する仕上がりがだ。最初は鍵括弧を一切使わない地の文だけで構成されたような書き方に読者は面食らうが、読み進むにつれこれは実際に発声された言葉なのか、それとも心中の自問自答なのか、更に作者が設定した発話者の真偽さえ疑わしくなり、独自の世界観に惑乱されてゆく快感がある。終盤で薄く狂気を感じさせ、そこに身を委ねてしまいたくもなりながら現実の生活が辛うじて人を踏みとどまらせる情なさが、奇妙に読者を惹きつける。「クマネズミと亡霊」(永田祐司)は後半の三島由紀夫出現あたりからやや説教臭いのが気になる。でもこの鬱陶しい正義感が主人公たる管理人の持ち味なのでもっと煮詰めてもらいたい。シャボン玉クレーマーの男の存在を掘り下げてみれば、管理人の思考の円周上に存在するのが分かる。前半部分のクマネズミ駆除についての奮闘ぶりはわかりやすく面白い。が、管理会社の担当者に駆除の初期設定を誤ったことを隠そうとする心理をもっと利用して焦燥感や緊迫感を演出できればよかった。そうすれば、後半の説教臭さも追い詰められた初老の男性の己の正しさをよすがに暴走する哀しい言い訳として読者の心情に強く印象付けられる。

優秀作推薦

「葛藤」山下定雄(「海馬」44号)

●「メタセコイア」(大阪府) 18号

「帰ったら、カレーにしよう」(春野のはら)は秀逸。主人公高橋真琴は中学受験して滑り止めに進学した高校を二年で中退、ひきこもりとなった。母からは「恥さらし」と呼ばれていたが、父は成人式のスーツを仕立ててくれ、間もなく病死した。三十三歳で姉の都合で家から追い出され、すぐ金を使い果たし、ある家に盗みに入る。そこで住人のおばさんに息子、亮と間違われた。似てもないのに強弁して、これ幸いに息子になりすまして居候となる。これをきっかけとして、なりすまし亮の人生が回り出す。まず、隣人の日置幸子が倒れ、救急車で病院に運ばれて亡くなる。幸子の娘は息子の少年日置コナンを置き去りにして消える。おばさんのパート先のコンビニが人手不足なのでとりあえず雇われ、少年コナンをほっとけず里親となる。姉の夫の弁護士や幸子の息子など、表面上きちんと社会生活をしている人の冷たさに比べ、亮の周囲の人々の人の好き、いい加減さ、面倒見の良さが、ドタバタしながら軽妙に描かれて物語は展開する。亮へのありえないなりすましを手始めに、ひきこもり、ホームレス、人手不足、育児放棄、無

戸籍などを盛り込みながら深刻にならずユーモラスに手際よく処理して無理がない。落ちこぼれだった主人公がコナンと生活しながら成長、結婚しコナンとともに生きていく。タイトルの「帰ったら、カレーにしよう」は観音節分祭に三人とおばさんがともに出かけた折、ネグレクトの結果、異常に偏食のコナンが唯一食べられるカレーを夕食にしようという、ほのぼのとした結末による。

●「あかね」(鹿児島県) 120号

編集室は鹿児島市である。内容は随筆、俳句、短歌、川柳、さつま狂句(歌詞は方言)、創作小説、ミステリー小説と幅広い。編集は手間のかかったもので、挿絵、カラー写真まであり、読みやすく整理されている。青香チエの創作「ジ・エンド(最終回)」では、文章の一部について書体を変える工夫までしている。

四本タエコの随筆「四十九歳の死」の中で、鹿児島で暮らした孤高の歌人浜田到に触れている。特別寄稿/上村直己による「七高造士館の独語教師たち(19)」ではエルンスト・プツチエルという最後の独人教師を紹介している。柳瀬良行の連載ずいひつは「焼酎物語五・六」である。鹿児島らしい地方色豊かな文章が並んだ。連載ずいひつ「落人の里(一)」を書いている東なや子が九十六歳には驚嘆した。嬰鏢おんせうたる文章である。

本の末尾には文章研究として、前号119号の作品批評が載

り、会員同士の和やかな交流が見える。

「友」を課題としたりひつが九作品あったが、すべて「友」を肯定的にとらえている。裏目に出る、失敗、裏切りなど負の面に着目した作品もあれば、より深く考えることができたであろう。

●「狐火」(埼玉県) 25号

「家の履歴」(山之内朗子)も秀作。この作品は戦後十年目に結婚してから六年間の新米主婦の生活をいきいきと描いたものである。近所の主婦と交流しながら、誰にとっても思い当たるような小さな出来事を、無駄のない文章が気持ちよく綴っていく。短いが心に残る作品である。

戦後十年目、住宅不足の時代に抽選で川崎市の新しい市営住宅に結婚して入居するのが始まり。姑と同居の同年輩の幸子は「気楽でいいわね」と言うが、主人公の姑は合鍵を持っているので留守でも自由に出入りし、突然来る。「いつ来るかと思うと、なんだか落ち着かないの。部屋も散らかしておけないで」と正直に答えた。心からくつろげず自分の家なのに自分の家でないような感覚の辛さ、この部分は作者が女性ならではの記述である。

娘時代に結核にかかり、やつと治って、決まりかけた縁談を破談にした主人公である。ある日、父が訪ねて来たが、お茶を切らしている。慎ましい生活である。娘を心配する父親の深い愛情が伝わってくる。

主人公より九つ年上の光江は頼りになる。一本しかない哺乳瓶を夜に割ってしまい、哺乳瓶を貸してもらったり、駄々をこねる子どもを適当にあしらってくれたり随分助けてもらう。田舎からの産物を贈り合ったり、子どもを預け合ったりしながら二人の子を育てているうちに家が手ぜまになってくる。横浜市の郊外の新築建売住宅に当選して転居するが、転居の話を出しづらかった。ようやく打ち明けると幸子も転勤の話があり、光枝は「よかった。あなたのことだから、また損ばかりするんじゃないかと思って心配したよ」と言ってくれた。光江のような隣人から離れることが寂しかった。

新しい家に住んで五十年以上、今は一人暮らしで、気心の知れた隣人たちがいる。安らかな終末で作品は終わる。作品の最終部分に横浜市の家にはタテハチヨウが来て、川崎市の家にもタテハチヨウが来たのを思い出すくだりがある。構成を少し変えて、最初に川崎市の家にはタテハチヨウが来たのを伏線として書いておき、最終部分に横浜市の家にはタテハチヨウが再び舞うとしてはどうか。タイトルも作品の一部であり「家の履歴」は無愛想なので、「タテハチヨウの来る家」はどうだろう。

優秀作推薦

「帰ったら、カレーにしよう」春野のはら(「メタセコイア」18号)

「家の履歴」山之内朗子(「狐火」25号)

小説の普遍的広がりや国際的構造の類似性が照射されて、新鮮な息吹をもたらしている。

大きな政治権力の圧倒的力の前に、打倒され、挫折していく若い虚しい力を、全共闘運動に加わって時代打破を試みた過去の情熱の行方を思い起こして、それを問い返す姿勢は、共感を響かせる。振り返ってみると、日本をあれほど揺るがせた全共闘運動を顧みる好小説にはほとんどお目にかからない。文学的な深さを持ち、人間を掘削して結晶させている小説作品を探しても、なかなか出会わない現状で、こうした当時に真正面から取り上げて向かい合う試みに出会えたのは、大きな世代的喜びである。あの時代、嵐のように吹き抜けていった学生運動は、ただ一時の狂乱としての思い出の風としてどこかへ去って行ってしまったのか、何か人間の根本的な問題に迫るものを残していったのか否か、全共闘世代が古希を超える時を迎えて、文学的な深さを後世に残すものとして結晶させ得るのは、今しかない。その意味での一つの成果として残し得る作品であることに、拍手を惜しまない。今後さらに書き残すべきものに果敢に挑んで、あの世代の足跡をより広く、より深く残してほしい。

一つ付け加えたいのは、同じ学生世代の抵抗運動として、香港だけでなく、一九七〇年代のタイの学生運動、また一九八〇年代のビルマの学生運動、そして現在のミャンマ

●「季刊作家」(愛知県) 99号
「季刊作家」はこの号は特に充実していて、力作が揃っている。「予感」(佐藤文平)、「ある恋物語」(初山のぶ)、「虹の彼方へ」(祖父江次郎)、「真金町界限」(門倉実)、「インソムニア」(富岡秀雄)、「そして明日香へ(三)」(鈴木洋治)の作品はよく磨かれた硬度を得ていて、輝きがある。誌面の余裕がなく詳しく触れられないのは残念だが、どれも準優秀作のレベルに達している。

中でも精彩を放っているのは、鈴木友範氏の「光復香港」である。質量ともに充実した内容を持ち、最後まで圧倒感を伴って読み切らせる。返還された香港を舞台とするこの小説は、中国本土政府がその権力下に旧来の自由を奪いつつ呑み込んでいく状況下、それに抗する学生たちの反政府運動に巻き込まれ、思わぬ関わりを持つ香港在住日本人が主人公となっている。身近に飛び込んできた彼らのひたむきな抵抗運動に、自己の学生運動の過去を重ねて、その抵抗の人間の姿を本源から掘り起こそうとする意志が、文章の背後に脈打っている。香港の抵抗運動と自己の過去の学生運動とがオーバーラップして再現されるところに、この

の学生運動・民主化運動と、構造的に繋がるものがある。それらの犠牲者をただ大死としてのみ処理できない見方を文学の一つの可能性として見るならば、歴史の中で圧殺されていく人間の、理想を目指す力を、蘇らせ、継承していく方向に形を残していくことは、全アジアの共通した課題でもあると思う。折しも、日大の理事長の不正問題が再び持ち上がり、重信房子がマスコミに再登場して、一つの節目を迎えている。厳しく振り返り、大きく把握していく大胆な試みをさらに期待している。優秀作。

●「ペン」(富山県) 15号
「ペン」は実直なひたむきさがよく出ている誌で、どの作品にも確かな生活の感覚が滲んでいて肌触りが快い。巻頭の「花に寄す」(白河葉)も、真摯に人間に向かい合おうとする意思是、色濃く伝わってきていい。



主宰の神通明美氏の「夏果てず」は、裁判所速記官としての記録がよく書き留められていて、普通では知り得ない裁判所の内部が垣間見えて興味深い。中に一つの人生が蔵されていて、それが文芸として脈動しているが、特に後半は職場の大きな構造的変化に筆が奪われて、記録報告の比重が増しているのが気になる。特にいいのは、速記書記官になるまでの練成期間で、筆が生き生きとしている。しかし後半は、その速記書記官を、機械録音を主とする作業に切替え、排除していく上からの大きな流れに押されて、人間の息遣いが乏しくなっている。これは確かに書き残すべき記録である。しかし仕事が機械に奪われていく、普遍的な時代移行を背景にしているために、どうしても避けられない流れではあるものの、もうひとつ象徴的な人間の姿を捉えて、文芸として動かしてほしかった。準優秀作。

この誌には、記録として残すべき意義深い作品がいくつもあり、「牡丹江から濟州島へ——私の軍隊生活——」(三野誠司)は、当時の徴兵や現地での陸軍の日常生活がよくわかって、貴重な記録となっている。

優秀作 「光復香港」 鈴木友範 (「季刊作家」99号)
準優秀作 「夏果てず」 神通明美 (「ペン」15号)
「予感」 佐藤文平 「ある恋物語」 初山のぶ 「虹の彼方へ」 祖父江次郎 「真金町界限」 門倉実 「インソムニア」 富岡秀雄 「そして明日香へ(三)」 鈴木洋治 (「季刊作家」99号)